

文書館
もんじょかん
動物記



書庫に棲む動物たち

16

辰

大蛇鱗之圖

寸恰好如圖一肘薄し。

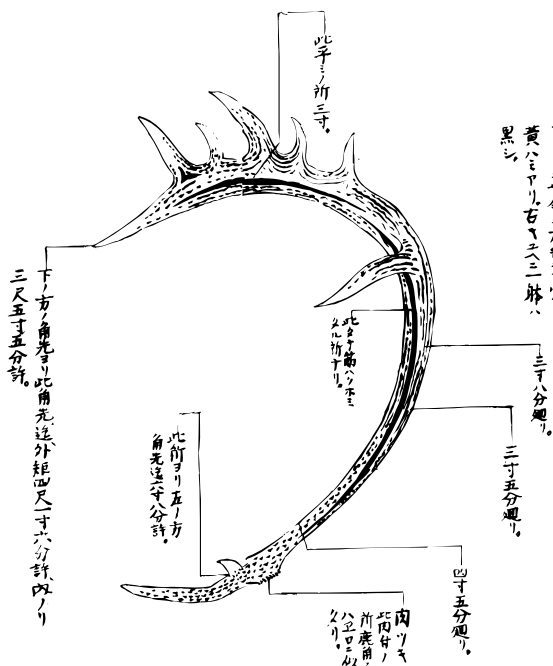
黒塗箱ニ納、尚上袋ニ袋ニ納。



大龍角

之圖 重月三百拾五錢目

一肘鹿角ノ如シ、黒點ノ所、高ノ角ノ先ハ古ノ白クアリシニ、今ニオチテ少シ黄クニアル、古ニハニニ黒クシ。



左：「防長古器考 有図 86」 右：「防長古器考 有図 65」

たつ

龍（大蛇）の系譜をもつ武士

龍と大蛇は共通のイメージ（「龍蛇」）としてとらえられることが多いのですが、民族学者の金関丈夫によれば、北九州や西瀬戸内海の海辺の豪族たちで、その先祖が龍蛇と交わったために、尾や鱗形を身につけていたという話は数多いといえます。

上の右の図は、そのような伝承をもつ「緒方（大神＝おおが）」一族に伝えられた「大蛇（龍）の鱗」です。金関によれば、「緒方」は「尾形」で、龍尾にちなむということです。

「防長古器考」（裏面参照）の添書によれば、この「大蛇鱗」は、一族の故地である豊後国の祖母山嶽明神が蛇神として現れたときの鱗であると記しています。大神氏は中世の豊後における在地武士として栄えますが、大神惟基については、祖母岳大明神の神体である蛇が人間と交わって生まれたとの伝説が『平家物語』や『源平

盛衰記』に見えています。それらによると、惟基の 5 代の孫が緒方氏の祖の緒方惟栄となりました。

同様に、伊予の河野氏も龍神の子孫であるとの伝えをもっており、「予章記」にみえる河野通信には、体に蛇鱗があったといえます。

また緒方（大神）氏の家紋「三つ鱗」は海の豪族の伝統をシンボリックに伝え、本姓が平氏の北条氏や、伊予の越智氏なども用いています。

上の左図は佐波郡宮市（現防府市）の浄土宗正定寺に伝わったという「大龍角」です。もともと長崎の町人が持ち伝えたものを寄付されたといい、「天竺大龍角信用之則逐諸毒風除諸頓疾病神妙也」と添書されています。その文言から辟邪（へきじゃ）に用いられたと考えられますが、その用法は明らかではありません。

「紅毛雑話」にみえる「龍」



著者森島中良自身の筆になる「ダラーカ之図」はツェンベリー（ツンベルク）からもらったトビトカゲを描いたもの。ダラーカ（Draco）はラテン語でドラゴン＝龍の意です。（「紅毛雑話」の展示シート参照）

「防長古器考」

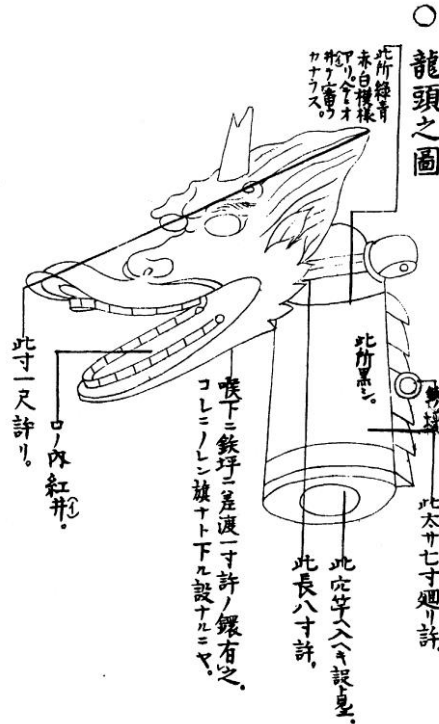
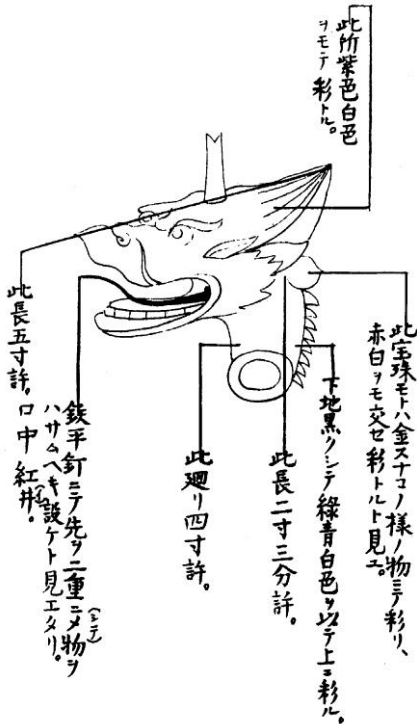
当館蔵の「防長古器考」は、萩藩が領内規模でおこなった貴重な美術工芸品調査で、安永 3 年（1774）に完成しました。現在、その多くは見ることができなくなっており、貴重な記録です。



「冑前立龍頭之図」

表面の「大蛇鱗之図」と同様、緒方家に伝わった冑（かぶと）の前立て。由緒等は特に記されていません。頭と角を木、その他はイタメ革製であろうと記されています。

龍頭之圖



氷上山興隆寺の「龍頭」

左右とも、大内氏の氏寺であった山口の氷上山興隆寺に伝わっていた「龍頭」（防長古器考 有図 75）の図。

「右龍頭大小二其外コレニ類スベキヤノ物モアレドモ審ラカナラヌ故略之。仁平寺本堂供養ノ記ニ、大太鼓幔幕并龍頭幡ナト記セリ。神事仏事樂屋ナトニ用ヒシニヤ。因テコレヲ図セリ」とあり、詳細は不明です。（「防長古器考 有図 75」）